

○別府誠二<sup>1</sup>・桑鶴紀充<sup>2</sup>・永田茂穂<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>鹿児島農総セ大隅・<sup>2</sup>鹿児島農総セ)

Labor-saving Methods for stable supply of squash on food service industry

BEPPU, S., N. KUWAZURU and S. NAGATA

【目的】

我が国の加工・業務用カボチャは安定確保や価格の面から、主に輸入に依存している。一方、農産物の国産志向の高まりの中で、実需者からはその安定供給が望まれている。しかし、加工・業務用は青果用に比べ安価で取引（契約等）されるため、経営として成立するためにはコスト低減や省力化による規模拡大を図る必要がある。そこで、青果用の生産技術をベースに、加工・業務用カボチャの国内産安定供給を目指した省力生産技術について検討した。

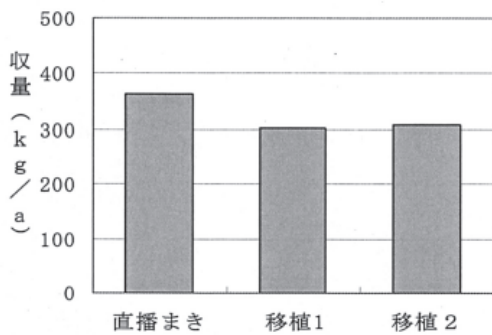
【材料および方法】

**試験1** 直まきが生育、収量、作業時間に及ぼす影響：播種は2007年3月13日で、直まき区、移植1区（50穴セル成型苗）、移植2区（72穴セル成型苗）を設け、1区10株2反復で実施した。**試験2** 自然受粉が収量、品質、作業時間に及ぼす影響：播種（直まき）は2007年3月13日、8月29日で、それぞれ自然受粉区、人工受粉区を設け、1区30～40株の反復なしで実施した。**試験3** 省力整枝が収量、品質、作業時間に及ぼす影響：播種（直まき）は2007年3月13日、2008年3月14日で、それぞれ側枝を全て除去する慣行整枝区、14節まで側枝除去後放任する省力整枝区を設け、1区35株2反復で実施した。いずれの試験も供試品種は‘えびす’で、栽植様式は畦幅5m、株間0.3m（66.7株/a）、親づる1本仕立てで実施した。

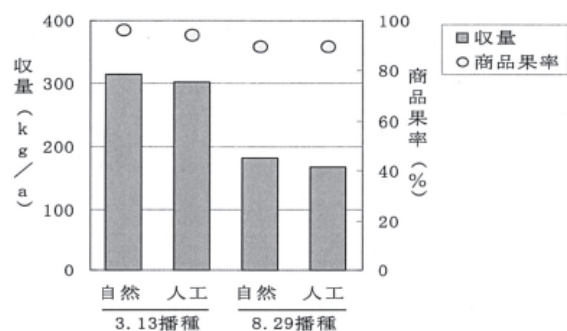
【結果および考察】

**試験1**：直まき栽培の生育は移植栽培と差はなく（データ略）、収量はやや上回った（第1図）。直まきに要する作業時間は移植法に比べて46%に短縮された（第1表）。**試験2**：自然受粉による収量、商品果率は人工受粉と同等で（第2図）、受粉作業時間が大幅に短縮された（第1表）。**試験3**：主枝15節以上の側枝を放任する省力整枝栽培における収量、商品果率は側枝を全て除去する慣行整枝栽培と同等で（第3図）、整枝・誘引作業時間は慣行整枝栽培の71%であった（第1表）。

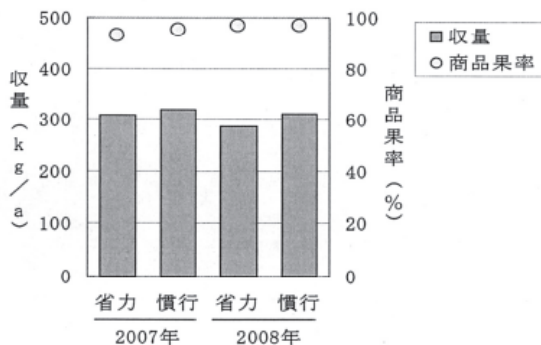
以上のことから、直まき、自然受粉、主枝15節以上の側枝を放任する省力整枝法による生育、収量は慣行栽培と同等で、これらを組み合わせることで、大幅な省力化が可能になる。



第1図 直まきと移植の違いと収量



第2図 受粉法の違いと収量、商品果率



第3図 整枝法の違いと収量、商品果率

第1表 管理作業時間の比較 (単位: hr / a / 2人)

管理作業	省力栽培 A	慣行栽培 B	省力程度 (A/B)	省力栽培の管理・作業の特徴
定植	0.6	1.3	46%	直まき
受粉	0	1.2	—	自然受粉
整枝・誘引	1.7	2.4	71%	15節以降放任

注) 定植時間：省力栽培の直まき時間と慣行栽培の苗定植時間の比較  
 受粉時間：2007年8月播種栽培でのデータ  
 整枝・誘引時間：2ヶ年（2007年、2008年）の平均